



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

ここまでできたと喜んで…

ある方から相談を受けた。「どうすればちゃんと整理整頓できるようになるのでしょうか。」「宿題は、遊びに行く前にさせないといけないですよね。」「ノートの字が乱れているから書き直しをさせたいのですが、いやがってやろうとしません。すぐにすねて、逆ギレされてしまいます。」などといったことである。

夏休みに入り、こんな相談も受けた。「学校があるうちは、時間になんとかけじめをつけながら毎日を送っていていこうとがんばっていました。けれど、夏休みになった途端、だらだらとすごしてしまい、これとって何かをやりきることなく2学期を迎えてしまいそうです。夏休みの後半は大変です。こちらからあれこれ言って聞かせないと勉強しません。」

こうした相談を受けるたび、自身の小学生の頃の夏休みを思い出す。とりわけ8月のお盆を過ぎた頃、夕刻の裏山から聞こえてくるヒグラシの声がものがなく、「時間よ止まれ」と念じつつ窓の外に広がる夕焼け空をにらみつけた。これと言ってやりとげたものがなかったからである。毎日綴らねばならなかった日記はなんとかダラダラとできていたが、ありきたりの内容だったので、先生に提出し読んでもらいたいと思えなかった。工作も自由研究もとりかかりはしたが思うようにはかどらず、投げ出してしまっていた。

しないといけないことはよくわかっているのにできないもどかしさが大きくなって、「世の中に自分ほど不幸な者はいない…」などとひどく落ち込んだのである。

そんな心境に追い打ちをかけるように、「階段の拭き掃除はやったの？」と母の声。毎日取り組むと決めていたことであり、ぞうきんがけをすればいいだけのことなのだが、ぐずぐずしている自分がそこにいた。

見ていて歯がゆく、苦しくなるのは見守る大人の側だろうが、当の本人も同じくらい、否それ以上に苦しい。もちろん、だからといって「これはこうだ」「かわりにやってみよう」とばかりに先回りして何もかも整えてやることは救いにならない。本人とて、友だちの手前、ずるいことをしたという後ろめたさを感じたり、自信をもってみんなに披露できず、負い目をもったりしてしまう。子どもの時期だからこそ、その場から逃げ出さず、なんとかしようともがき、苦しいところを乗り越える体験が大切なのだ。やがてできあがった物に間違いがあり、たとえ完璧でなくても、そこで得られた達成感、満足感が、やがてものごとにも実直に取り組む姿勢を育む。

何かにつけて結果を重視し、効率性、生産性だけでものごとのよしあしを決めることが多くなった。宿題の仕方、勉強に取り組む姿勢について、見栄えよくできたかどうかと目先のことに気を配ることは確かに大切だろうが、時間の許す限り、取り組み方や本人の思いもあたたかく受けとめてやりたいものだ。見栄えや出来映えばかりを問う関わりは、互いを不幸にしてしまう。

先の相談には、「じっくり見守り、思いを受けとめてやってほしい。『ここまでできた』と喜ばないといけないことを、『これだけしかできていないのか』と咎めないようにしてやってほしい。」と応えた。